

三月革命以後のドイツにおける出版文化（2）

— 1848年から1871年までの出版界 —

平井昌也

序

1840年代末、革命が水泡に帰したドイツでは、社会の反動化が一気に進み、そのため自由主義的風潮は後退し、革命前の復古的時代が再来した。この社会的変化は、革命後の出版文化に途方もない影響を与えた。前稿で述べたように、反体制的出版活動の排除を目的に、革命挫折後のドイツ各国では、次々に出版抑圧法が成立した。その流れはドイツ同盟全体に及び、遂に1854年にドイツ同盟出版法を成立させるに至った。革命前よりも精密さを増したこの出版法によって、これ以降国家による熾烈な出版弾圧が展開される。そしてこの出版界を取り巻く環境の激変によって、出版市場は革命期とは大きく異なった方向への転換を迫られることになる。

それでは1850年代から60年代に至るまでのドイツの出版市場は、どのような変遷を遂げたのか。またその変化は出版文化にどのような影響を与えることになったのか。本稿では、この問題について考察していくことにしたい。

1 革命後の定期刊行物

ドイツ同盟の反革命の動きは1850年代から活発化するが、出版関係では54年にドイツ同盟出版法が成立し、出版への監視を強化する責務が同盟各国に課せられた。この法律により、バーデン、ヴェルテンベルク、フランクフルトなど自由主義的風潮が残存する地域にも、出版市場に対する監視強化への共同歩調が強制された。こうして革命期に見られた自由な出版活動は次第に衰えて行った。バイエルンの出版取り締まりの統計に依ると、50年代を通じて司法による印刷物の差し押さえは576件発

生し、他方警察の押収件数は3,456件にも及んだ。また裁判所の発禁処分に関する年代別の統計では、55年に108件、58年に94件、そして59年には62件となっている¹。この数字から、50年代の発禁処分の判例数は減少傾向にあることが見て取れるが、だがこれを単純に当局の出版に対する姿勢の譲歩と捉えるのは誤りであろう。それなら、この数字の減少は一体何を意味するのであろうか。とにかくこの統計から、国家による出版弾圧の効果が何らかの形を取っていったことが推察されるが、本章ではその効果とはいかなる性質のものであったのかを検討したい。それでは、先ず定期行物（新聞・雑誌）の領域を取り上げることにする。

（1）新聞

出版の自由が保証された革命下では、新聞各紙は挙って政治的色彩を強めた。既存の新聞は紙面を大幅に政治・社会に関する記事に裂く一方で、他方新たな政治新聞が相次いで創刊された。時々刻々と変化する革命の情勢を伝える新聞は一般大衆の興味の的となり、読者を大幅に増やした。しかし革命が挫折して、一切の政治的発言が許されなくなって以降、それら政治新聞は苦境に立たされた。厳しい出版監視が行われ、紙面で政治を扱い続けることは、大きなリスクを伴う無謀な冒険となったからである。仮に危険を顧みずに政治傾向を保持しようとしても、それは別の意味で無謀な試みだった。社会の反動化が進むなかで、市民の政治的関心は薄らいで行き、彼等の興味はとっくに革命から遠のいていたからである。そのため新聞側は、編集方針の転換の必要性に迫られた。つまり存続を図るなら、出版法に抵触しないような形で、新たな紙面作りに努力すること、そして購読者を再度獲得するため、新聞市場の傾向、即ち読者の関心を適確に把握することが急務となった。

そこで当時の社会背景の推移に目を転じてみる。1850・60年代のドイツでは、政治面の遅れに比べ、経済・産業の分野は大きく進展した。産業改革による機械制大工場の出現は、生産性を飛躍的に向上させた。また労働需要の高まりは、鉄道網の進展に支えられ、農村から都市への人口流入を促した。特にプロイセンの重工業の進展には目覚ましいものがあったが、その結果ドイツの国民総生産は、この20年間で2倍に、対外貿

易高は3倍に達した。このような産業の発展に加え、三月革命が大きな成果を生まなかったことも要因として、市民の関心は政治から経済へと移行した。既にこの時期に70年代の会社設立ブーム（Gründerzeit）を思わせる兆候が見られ、株式会社の設立件数は50年代だけで107にのぼり、この数字は19世紀前半の50年間における設立件数（23件）を遥かに凌ぐ²。企業熱の高まりは、市民の力が政治運動から経済運動に振り向けられたことを示唆するが、続く60年代では市民の関心は専ら経済・産業に向けられた。政治的関心は、ドイツの統一問題、大ドイツ主義か小ドイツ主義かの選択に揺れた程度で、以前の根本的な民主的改革への要求は単にドイツのあり方を問うものに変貌し³、もはや革命を望む雰囲気は感じられなくなった。それに応じて新聞購読者の興味も、政治新聞から離れた。

革命後検閲が再導入されたことは、紙面づくりを変化させる根本的な要因になった⁴。『新ケルン新聞』（*Neue Kölnische Zeitung*）などの政治新聞は、相次ぐ発禁処分で姿を消した。また女性の手によって発刊された政治新聞も、50年代以降に女性を責任編集者とした新聞・雑誌の発行を禁止した出版法の成立で、ことごとく消滅した⁵。そのため残った新聞は政治色を消し去り、内容を刷新させたものに限られた。そこで革命後の新聞購読者の傾向が問題になる。彼等は産業・経済分野での実利的な知識を求めようになり、また反動という意味で安定した社会情勢の中で、社会的変化を求めるとより娯楽へと向かった。それに応じて、新聞は娯楽紙の傾向を強めていくことになる。そこで浮上するのが、新聞と小説の繋がりである。この時期の新聞は、読者の娯楽的読み物への要望に応えるため、文芸欄に力を入れ始めた。紙面全体に占める文芸欄の比重は徐々に増して行き、やがて小説だけを掲載した付録をつけた新聞まで現れた。そしてこの時期の新聞では、連載小説という形式が大きく取り上げられたのである。

読者が読書の間を新聞に求め、直接書籍に向かわなかったのには、経済的な理由がある。書籍はこの時期でも高価なままで、書籍が一般に5及至6ターラーもの値を付けていたのに対し、新聞は四半期の購読料がわずか1ターラーで、それゆえ新聞は読書欲を満たすのに手軽な媒体として重宝された⁶。特に娯楽色の強い大衆小説は、書籍ではなく新聞で

広まった。その後新聞と娯楽小説が合体した小説新聞 (Roman-Zeitung) なるものも現れ、60年代にその勢いを強めた。1864年に創刊された『ドイツ小説新聞』(*Deutsche Romanzeitung*) は週2回発行され、ラーベ (Wilhelm Raabe) やグツコウ (Karl Gutzkow), ハイゼ (Paul Heyse) など、名の知れた作家の作品を掲載して多くの読者を引き寄せた。また作品の形式は、長編小説よりも短編小説が好まれた。それは短さという点で新聞に掲載するに適していたからで、例えば新聞で公表されたハイゼの短編は150を越えた⁷。

このような文学と新聞の結び付きを、当時の批評家ハウフ (Hermann Hauff) は、文学と産業との誤った婚姻と見做して、精神の所産を商品化するものと批判した。だが、彼の見解は必ずしも主流派の意見ではない。ラーベはこの結び付きを肯定的に解釈したし、ハイネ (Heinrich Heine) は客観的に文学作品を商品と考えたからである⁸。もちろん娯楽提供としての役割に専念することに、異を唱える新聞も存在した。1853年創刊の『民衆新聞』(*Volks-Zeitung*) は、教養の伝達を目的として娯楽を排し、自然科学の基礎知識などの紹介を行った。しかしこの姿勢は読者の要望に合致せず、思ったほどの反響を呼ばなかったので、当初の目的を断念し、娯楽的要素に重心を移していった⁹。

この時期の新聞の主流は、娯楽的読み物を提供する傾向に流れた。その流れに迎合しない新聞の運命は、ビスマルク (Otto von Bismarck) の登場で決定的となった。ビスマルクは63年に出版令を発効し、殆ど無制限の検閲権を行政官庁に与えた。それによって自由主義的な思想を伝える新聞はもちろんのこと、社会批判、特に国家体制を批判するような論説を掲載する新聞は、制圧されてしまった。そして残されたのは、文芸欄に力を注ぐような、国家にとって害のない新聞だった。それ以外の新聞には、なるほど党派新聞 (Parteizeitung) のような新聞も存在したが、国家に反抗しないかぎりでは存続できたのであって、しかもそれらの新聞は限られた範囲の購読者を獲得したに過ぎなかった¹⁰。その他には、ウィーンの『キーケリキー』(*Kikeriki*) やミュンヘンの『ピラ』(*Fliegende Blätter*) に代表される滑稽新聞 (Witzblätter) が、広範囲な読者を獲得したが¹¹、それも社会批判が軽妙な皮肉や風刺に向かっただ

けであり、娯楽的な読み物へ傾斜するジャーナリズムの姿勢に変わりはなかった。こうして革命後の新聞は、政治・社会への批判能力を失い、面白さを演出する媒体としての役割に転じた。この点で、出版を政治から遠ざけ、その批判能力を減ずることを目的にした出版統制は、それが意図した通りに、新聞の非政治化を促進したのである。

(2) 雑誌

革命期には、雑誌の分野でも政治的傾向が強まり、たくさんの政治雑誌が創刊された。だがやはり革命後の弾圧にあって、その多くが消滅した。1848年に創刊された269もの雑誌はことごとく50年までには姿を消した。続く3年間で213の雑誌が創刊された一方、それを上回る327誌が廃刊となった¹²。雑誌の年間総タイトル数は減少し、革命前のピーク時へと回復するには、後の世紀末まで待たねばならない。また売上についても、検閲による雑誌出版への締めつけと読者の娯楽傾向による政治雑誌離れで、50年代は総体的に退潮気味だった¹³。

政治・社会に関する内容を減少させた革命後の雑誌出版は、新聞と同じく娯楽小説を提供する方向へと向かった。そして大衆向けの文学雑誌が市場で主流を成し、美学的に質の高い純文学雑誌と学問的教養を扱った専門誌は後退した。大衆小説に重点を置いた雑誌の『絵入りの世界』(*Illustrierte Welt*)は、60年代に10万を越える発行部数を誇った。またこの時期に流行した家庭雑誌(*Familienblätter*)と呼ばれる新しいジャンルの雑誌は、娯楽的読み物を主体として、地方新聞の発行部数が3,000部を越すことが稀な60年代に、平均して19,000部も発行された¹⁴。それに比べ、教養文芸雑誌の『ヴェスターマン月刊誌』(*Westermanns-Monatshefte*)は、70年代半ばでも15,000部で、雑誌の売上としては相対的に低いレベルに留まる。他にも、『ペニヒ・マガジン』(*Pfennig-Magazine*)のような、新しい工業技術や自然科学の情報を扱った文化雑誌(*Kulturzeitschrift*)も発行されたが、娯楽雑誌の勢いに押され、売上は芳しくなかった。

娯楽雑誌の好景気には、大衆文学への読書欲以外に、雑誌の価格面が大きく影響した。雑誌の年間購読料は、安いもので2ターラーから、高

くても10ターラーほどであった¹⁵。それゆえ書籍より遥かに安くつく雑誌購読で、小説を楽しむことができたのである。

1850・60年代を通じて、雑誌は主に文学作品の発表の場としての性格を強めていく。この動きを、ケラー（Gottfried Keller）のように批判的に見る向きもあったが、それは寧ろ少数派の意見であり、グツコウが「雑誌は本の代用品」と考えたように、多くの作家は雑誌への寄稿を肯定的に受け止めた¹⁶。肯定派はその際、雑誌が彼等に与えてくれる恩恵のことを忘れてはいなかった。有名雑誌に寄稿すれば、時には出版社よりも高い報酬が望めたからである。また雑誌の発行部数は書籍の10倍から15倍を上回り、絶えず新しい原稿の需要があった。大手の雑誌は著名作家の作品を掲載したが、地方の弱小雑誌は、経済的な理由などからそのような作家に原稿を依頼できなかったので、無名作家に作品発表の機会を与えた。それゆえこの種の雑誌は、新人作家の登竜門にもなっていた。報酬面では、下は無名作家の問題にならない額から、ケラーやフォンターネ（Theodor Fontane）の1ボーゲンにつき300から500マルク、更に上のシュトルム（Theodor Storm）の600及至700マルクまで様々だった¹⁷。ケラーは『チューリヒ短編小説』（*Züricher Novellen*）の報酬に、『ドイツ展望』（*Deutscher Rundschau*）から2,400マルクを受け取り、またフォンターネも同雑誌より、2,000から3,000ターラーの報酬を受けていた¹⁸。書籍の売上不振で出版社の原稿料が依然として低迷するこの時期に、雑誌は作家にとって貴重な収入源となっていた。また娯楽雑誌の好況は文学作品の需要に繋がり、文学の雑誌への依存度は増大していったのである。

この時代の雑誌は、新聞と同様に文学作品、主に娯楽的色彩の強い小説を提供する媒体としての性格を強めた。革命期のような政治的傾向はもはや見られず、例えば『あずま屋』（*Gartenlaube*）のように、自由主義的思想を内包していても、但しそれは国家主義的自由主義の範疇を越えない、即ち国家に忠実な形のものであった¹⁹。ここでも、出版活動への国家的干渉が影を落としており、雑誌界は出版法に抵触することのない安全な出版活動を展開するようになっていた。そして雑誌は、政治的要素を払拭した娯楽的読み物の仲介者として、新聞とともに書籍に代わ

る役割を果たしたのである。

2 文学の受容

文学市場が低迷期に直面する一方で、定期刊行物が書籍に代わって、文学作品を読者に提供する役割を担うようになった。それでは書籍を含めた印刷物全般は、どのような経路で読者の手にもたらされたのだろうか。印刷物は出版社から取次業社及び書店を経て、消費者である読者の手に渡るが、この時期には、それとは異なる他の経路が存在した。その経路とは、本の行商と貸本屋である。本章では、この行商と貸本屋の活動に視点を当て、出版市場の変遷を流通面から考察したい。

(1) 行商

印刷物の頒布手段としての行商は、革命前より広く行われていたが、1882年には書籍販売業の20パーセントを占めるまでに大きく成長した。行商は既に30年代に活発化したが、組織的に運用し始めたのはマイアー (C. J. Meyer) で、またコッタ社は行商を利用して、シラー (Friedrich von Schiller) の作品を、39年に12万部も販売した²⁰。革命後のドイツでは、この販売形式が本格化する。当初行商人の活躍の場は都会からの遠隔地、即ち出版物の流通しにくい地方に置かれたが、革命後は都市部にも広がった。行商で扱われる商品は大体次の通りである。第一に、普通の書店が扱う商品と同じもので安価な部類に属する書籍。第二に、行商が専門的に扱うカレンダー、料理や夢占いなどの小本。最後に、雑誌の類。ここでの雑誌とは、市場で普通に出回るもの以外に、行商が専門に扱う雑誌をも指し、教養とは無関係の、通俗且つ娯楽の科学雑誌が販売された²¹。行商で代表的な最大手には、行商を専門的に行う営業形態では、ベルリーンのグロッセ (Grosse) とドレーズデンのミュンヒマイアー (Münchmeyer) が挙げられる²²。

行商は一定の場所で営業するのではなく、各地を転々と歩き歩く商売上、当局からその活動を正確に把握されにくい面を持っていた。そのため三月前期には、取り締まりの目を盗んで、正規の商品とは別に、発禁処分を受けた本や雑誌など不正な商品がこのルートで売買された。この

種の商業活動は既に革命前から警察の監視を受けていたが、行商人の滞
在場所が不定である上に、彼等の活動がドイツ同盟全域に及んだため、
監視の目は行き届かず、警察は注文リストを検査する他に取り締まる術
を持たなかった²³。しかし当局は違法文書まで扱う行商の監視を強化す
るための法整備を進め、その結果あまねく出版法には行商に関する規定
が設けられた。54年のドイツ同盟出版法にも、行商に関する規定は、第
3条で目にすることができる。

印刷物の行商は、公的機関の許認可がある場合に限り、またその当該
地域内でのみ、公共の場所での頒布、提供、分配並びに陳列が許可され
る²⁴。

上記のように、行商には許認可制度が導入されたうえ、その営業地域
も限定された。またオーストリアの出版法では、行商への規定は、これ
とは比較にならないほど厳しいものだった。即ち行商形式による書籍販
売は、1848年に全面的に禁止されたのである。この規定は74年に更新さ
れ、行商人は出版市場から締め出された²⁵。

行商の特徴としては、行商人は出版物の頒布以外に、情報提供者の働
きをした点が挙げられる。彼等は遠隔地の、外部から閉ざされた共同体
の中へ入って行き、外界での出来事、都市部における社会変革や革命の
動き、あるいはその思想・理念などを口頭で伝えては、地方の人々の貴
重な情報源となった。行商人は、書籍販売以外に、新しい知識の運搬人
として、自由への要求や社会批判など改革的な精神をも広めたのであ
る。しかしそのような行動は、体制側から煽動活動の一部と見做されて
干渉を受け、行商人が公の場で世情を吹聴することは禁止された²⁶。

19世紀前半には地方の出版流通の重要な担い手だった行商は、50年代
以降順調に成長する。行商でも定期刊行物が多く販売されたが、ここ
での定期刊行物とは、小冊子が中心である。1枚きりの印刷物から量の多い
雑誌に至るまで、様々な分量の読み物が扱われたが、とりわけ8ページ
から64ページまでの小冊子が商いされた²⁷。印刷物の内容は読みきりのも
のより、連載小説が好まれた。都市部での行商の主な顧客は、読書にあま

り費用をかけられない労働者や手工業者、奉公人などの下層市民だった。肩の凝らない娯楽小説が好まれ、はらはらどきどきさせる推理小説や怪奇小説、それに血生臭い犯罪小説が人気を呼んだ。大抵毎週土曜の夕方に行商人によって運ばれてくる連載小説が心待ちにされ、幸いポケットに小銭のある者は羨望の的になった。そして購入された冊子は、日曜日と仕事の合間に夢中で読まれた²⁸。ただ、ここでの読書は理性的批判行為の伴わない、単に受容するだけの享楽的行為であった²⁹。そのため行商人は、結果的に読書の軽薄化を助長したとも言えるだろう。

行商は主に下層市民に受け入れられたが、社会的少数派に属する中流階級以上の市民は、新聞・雑誌を購読していた。新聞・雑誌は小説を主体に取り上げる一方で、産業・科学分野における専門知識も扱ったのだが、行商本では専ら小説、それも高度な内容を伴わない大衆小説に人気が集中した。なぜなら下層市民はまだ未熟な読書能力しか身につけていなかったもので、分かり易くて面白い小説が好まれたのである。上述したような読者に興奮を与える刺激的な小説以外にも、社会の底辺の人々の日常的貧困と不幸を題材にした物語が、共感を持って受け入れられた。また単純に愛国心や敵国への憎悪を煽る戦記ものが好まれた³⁰。しかし注意を払うべきは、単なる娯楽小説であっても、自由な叙述が許されたわけではないということである。ここでも当局の出版干渉が見られ、戦争に批判的な内容があれば、即検閲対象となった³¹。その他にも、政治と宗教に関する記述は許されなかった。

革命後も行商への当局の監視は続行され、その結果行商が扱う小説の題材は検閲対象に当たらないものに限定されて行った。そこでは、社会批判など個人の外へ向かうものは少なく、個人や家族の葛藤といった内面へ向かうか、または読者を取り巻く現実社会とは無関係の世界を舞台にした冒険小説や旅行記が好まれた。こうして行商で販売された小説の内容は、三月前期とは逆の非政治的な方向へ進んでいったのである。

(2) 貸本屋

貸本屋は19世紀に入り、本の購入が経済的に困難な人のために、安価な利用料で本が読める場所として広まっていく。当初は一定の会員を対

象とする、利益を度外視した読書サークル的な形態を持っていたが、次第に不特定多数の人を対象とする利潤追求型の性質に変化した³²。19世紀前半での貸本屋は、教養を身につけるための施設（*enzykropädische Leihbibliothek*）としての傾向が強く、それゆえ提供される読み物は、読解力を必要とする専門書や高度な文芸作品を中心としていた。しかし19世紀後半に入ってから以降は、純粋に読書を楽しむための娯楽施設（*Unterhaltungsbibliothek*）としての性格を強め、そのため難解な書物より大衆文学が多く提供された。

ドイツの貸本屋は、1855年で2千軒あったとされ、その蔵書数は地方の小さな貸本屋で2千冊、大きな店では5千冊、また大都市の最大手の貸本屋では50万冊にのぼった³³。また年間利用料は、50・60年代で3から5ターラー程度と安く設定された。これに対して長編小説の本の価格は少なくとも5ターラー以上した。貸本屋の年間利用額は書籍を1冊購入するより安く設定されていたので、この頃の一般読者層が本の購入より、貸本屋の利用に走ったのは当然の帰結だと言える。そして貸本屋は加速度的な成長を遂げ、やがてはその利用者のみならず、文学市場にも巨大な影響力を及ぼすことになった。

まず貸本屋の隆盛は、本は買うものではなく借りるものだという意識を利用者に植えつけ、書籍の所有欲の希薄化に手を貸した。1872年になってさえ、ドイツにおける書籍の総売上はおおよそ800万ターラーに留まり、これを国民一人当りの書籍に使う金額に換算すると、わずか80ペニヒにしかならない³⁴。このように貸本屋の発展に反比例して、書籍販売数は伸び悩み、結果的に貸本屋の隆盛は、文学市場の縮小化を招来したと言えよう。

次に貸本屋は、文学市場の動向を決定づける働きを有するようになった。革命後の出版界は、一般読者が書籍の購入を手控えるなかで、不況に直面しており、そのような情勢下で売れる本づくりに集中しなければならなかった。そこで出版者は、貸本屋との関係を深めていった。なぜなら、貸本屋は書籍の主たる販売先となっていたからである。例えばコーバーとマルクグラフ（*Kober und Marggraf*）社の出版戦略に、それを見ることができる。この出版社より発行された『アルバム』（*Album*。

Bibliothek deutscher Original-Ramane) は、販売対象を一般の消費者にではなく、貸本屋に置いた。つまり、出版前に貸本屋と売買契約を結び、総部数の75パーセントの売上を予め確保しておいたのである。そしてその残部が、売上を予測できない一般消費に回された³⁵。この前もって販売部数を貸本屋で確保する方法を用いて、『アルバム』は、小説の発行部数が平均して600から800部だった60年代に、各巻3,000部で発行された。しかもドイツ人作家のオリジナルの作品は利益に直結しないという当時の常識を破って、この双書は好調な売上を誇ったのである。他にも、バッハーアルト (Therese Bacherart) に代表される、50年代に流行した女流小説 (Damenroman) は、ベルリンにある800軒の貸本屋だけで、既に売上部数を計算できた³⁶。このような販売部数の高水準の維持は、貸本屋の存在抜きには考えられなかった。

貸本屋で扱われる印刷物は、書籍のほか定期刊行物、つまり娯楽作品を内容とした新聞・雑誌も扱った。娯楽小説と定期刊行物の関係は、ここで更に貸本屋とも結び付いた。例えば63年創刊の『ドイツ小説新聞』 (*Deutsche Roman-Zeitung*) が、その典型である。この娯楽的読み物を扱う定期刊行物は、貸本屋向けに発行されて、初年度には短編小説と滑稽小説を合わせて12編の作品を、貸本屋利用者に提供した³⁷。仮に書籍を購入する形で、これと同数の小説を読もうとするなら、50及至60ターラーもの費用を負担しなければならず、前記した貸本屋利用額と比較すると、その10倍以上の出費が必要になってしまう。

さて、このように発展していった貸本屋であるが、その利用者の間ではどんな種類の書籍が受容されていたのだろうか。そこで1860年前後の貸本屋の蔵書リストから、当時の読書傾向を探ってみる³⁸。表I左欄は都市部の例として、ヘッセン州ハーナウで営業していたヴェンツェル (Johann Heinrich Wenzel) の貸本屋の蔵書リストを掲げた (1857年)。右欄は地方の貸本業、フルダのヘルスフェルトにあるマイアー (Aloys Maier) 貸本店の蔵書リスト (62年) である。尚、地方にあるマイアーの蔵書数のほうが多いのは、ヴェンツェルのリストは創業時点のものだからであって、ヴェンツェルはその後2年間の補充で1,368冊を所蔵するに至っている。

表 I

	冊数	%	冊数	%
総数	587	100	724	100
<専門書>	5	0.85	53	7.32
地誌, 民族学	(2)	(0.34)	(40)	(5.53)
歴史, 政治	(1)	(0.17)	(2)	(0.28)
伝記, 自伝, 書簡集	(1)	(0.17)	(11)	(1.52)
哲学	(1)	(0.17)	(0)	(0.00)
<娯楽文学>	575	97.96	654	90.33
長編小説, 物語, 伝説				
メールヘン, 逸話	(470)	(80.07)	(625)	(86.33)
演劇	(69)	(11.76)	(3)	(0.41)
詩集	(1)	(0.17)	(0)	(0.00)
児童図書	(18)	(3.07)	(0)	(0.00)
年鑑, 日記	(17)	(2.90)	(26)	(3.59)
<全集>	3	0.51	11	1.52
<作品集>	1	0.17	6	0.83
<雑誌>	3	0.51	0	0.00
	Wenzel in Hanau		Maier in Hersfeld	

上の表から、娯楽文学の占有率の高さが指摘できよう。これは予備知識が必要とされる専門書より、肩の凝らない娯楽文学を好んだ利用者の読書傾向の表れと言える。ヴェンツェルのこのあと2年間に補充された779冊のリストを見ても、娯楽文学が専門書の数を大幅に上回っており、なかでも騎士小説や盗賊小説、それに怪奇小説など大衆小説の補充点数の多さが目立つ³⁹。作家では、ミュッケ (Theodor Mügge)、イフランド (Wilhelm Iffland)、その他にシラー、グツコウなどの名前が見られる。他方マイアーが所蔵する本には、ゲシュトレッカー (Friedrich Gesträcker)、ハックレンダー (Friedrich Wilhelm Hackländer)、有名作家ではムント (Theodor Mundt)、フケー (Ferdinand de la Motte

Fouqué) の小説がある。ただ双方の店にゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の名は見当たらない。

貸本屋での大衆文学の流行の原因には、既に指摘してきたように、社会の変化を背景にした読者の嗜好の移り変わりがある。その他の点では、政治・思想を扱う書籍が出版統制によって読めなくなったことに起因するところが大きい。貸本屋も行商と同じく当局の監視下にあり、結社の禁止という意味からも、読書サークルの性格を持つ貸本屋の営業活動は、厳しく取り締まられたからである。ドイツ同盟出版法第2条の貸本屋に関する取り締まり規定は、次のようになっている。

[...] 貸本業または書籍閲覧業の事業主の営業活動については、全ての同盟国家において個人の特別認可（公的機関の承認）が必要とされる。その認可（公的機関の承認）を取得した営業主に限り、認可（公的機関の承認）規定に従い、印刷物の生産並びに印刷物の商業的取引が許可されるものとする。

営業上の違反行為があった場合の認可（公的機関の承認）の取消は、裁判所の判決及び行政手段により執行されるものとする。但し、行政手段による執行は、前もって文書による警告が繰り返し行われた後でも、または裁判による処罰の判決が出た後でも、上記の営業主が違反文書、特に反国家的文書の頒布を目的に、営業活動を続行した場合に限り行われるものとする。

取消可能なものとして認可された事項は、上記した対応措置なしでも、行政手段によって取り消すことが出来るものとする⁴⁰。

この規定に従い、1848年以前に認められた営業権は全て無効とされ、あらゆる貸本屋には営業の許認可を申請し直すことが強要された。ここで注意しなければならないのは、全ての貸本業者が営業権を再び取得できるとは限らなかった点にある。この第2条の規定により、国家は自らにとって好ましからざる人物を、貸本業から締め出す機会を手にしたのだった。こうして貸本業界からも、自由主義的な空気は排除された。それに利用者の政治離れも加わり、貸本業における政治的印刷物の流れは

殆ど塞き止められた。

小説を読む際、市民の90パーセントが貸本屋の供給に依存していたとされる⁴¹。このような貸本屋での小説の高い利用率は貸本屋と出版社の関係を深め、両者の関係の密接度が高まると、遂には書籍の売上は貸本屋の動向に大きく左右されるようになったのである。

社会の反動化と出版統制の強化を背景にして、革命後の出版界は、全体的に高いリスクを伴う政治領域から撤退し、読者の要求と利益に適った活動へと向かった。即ち、娯楽文学への傾斜である。政治的発言を排して、検閲を回避しようとする出版側の姿勢には、国家的統制への従順な対応が見え隠れする。このような出版側の姿勢には、革命後の出版監視と19世紀前半の出版弾圧の経験が相当に影響している。出版法の成立によって、本来自由な活動が保証されるべき出版市場に、出版統制による一定の枠組が与えられた。そのため出版市場は、残された空間内での、つまり出版法に抵触しない範囲内での活動を迫られ、そのため体制にとって脅威とならない形で変遷していったのである。

この時期の出版市場の特徴に、書籍売上の低迷がある。その要因は、読書空間の多様化にあった。書籍に依らない読書、つまり新聞・雑誌・冊子類を媒体にした読書形態が浸透していったのである。また書籍と読者を仲介する主役が、書店ではなく貸本屋に移った点も大きい。書籍を購入せず小説が読めた状況と、娯楽文学への定期刊行物の参入が、文学市場に与えた影響は測り知れない。本という形式を取った文学作品の消費の低迷は、文学傾向の決定要因となり、延いては出版社と作家の活動に大きな影響を及ぼした。この時期の文学市場、即ち革命後の文学作品と作家を取り巻く状況については、次稿で取り上げる。

注

- 1 Kohnen, Richard : *Pressepolitik des Deutschen Bundes*, Tübingen 1995, S. 103.
- 2 末川清『ドイツ史2』（成瀬治 木村靖二 山田欣吾編）山川出版社 1996年 351ページ参照.
- 3 Nipperdey, Thomas : *Deutsche Geschichte 1800-1866, Bürgerwelt und starker*

- Staat*, München 1998, S. 700.
- 4 新聞統制に関しては、拙稿を参照されたい。『三月革命以後のドイツにおける出版文化（1）—1848年から1871年までの出版統制—』関西大学『独逸文学』第42号 1998年 関西大学独逸文学会 315ページ以下参照。
 - 5 川越修了『ドイツ史2』（成瀬 木村 山田編）335ページ以下参照。
 - 6 Wittmann, Reinhard : *Buchmarkt und Lektüre im 18. und 19. Jahrhundert*, Tübingen 1982, S. 129.
 - 7 Müller, Gerd : *Deutsche Literatur*, Bern 1997, S. 110.
 - 8 Winckler, Lutz : *Autor-Markt-Publikum, Zur Geschichte der Literaturproduktion in Deutschland*, Berlin 1986, S. 82.
 - 9 Rollka, Bodo : *Die Belletristik in der Berliner Presse des 19. Jahrhunderts*, Berlin 1985, S. 252.
 - 10 Koszyk, Kurt : *Deutsche Presse im 19. Jahrhundert, Geschichte der deutschen Presse Teil II*, Berlin 1966, S. 138. 例えば保守派の新聞『新プロイセン新聞』（*Neue Preußische Zeitung*）の発行部数は6,000部弱で、自由主義派の新聞『改革』（*Reform*）は3,000部程度に留まる。
 - 11 Wittmann, Reinhard : *Geschichte des deutschen Buchhandels*, München 1991, S. 256.
 - 12 Wittmann 1982, S. 150.
 - 13 Nusser, Peter : *Trivilliteratur*, Stuttgart 1991, S. 35.
 - 14 Siemann, Wolfram : *Geschichte der deutschen Literatur Biedermeier-Vormärz Bürgerlicher Realismus*, Stuttgart 1998, S. 82.
 - 15 Wittmann 1982, S. 152.
 - 16 Müller 1997, S. 17.
 - 17 Winckler 1986, S. 87.
 - 18 Ibid., S. 87.
 - 19 Wittmann 1991, S. 256.
 - 20 Wittmann 1982, S. 139.
 - 21 Nusser 1991, S. 31.
 - 22 Wittmann 1991, S. 251f.
 - 23 Kohnen 1995, S. 97.
 - 24 Bundes-Preßgesetz, Allgemeine Bundesbestimmungen zur Verhinderung der Mißbrauchs der Preßfreiheit, §3.
 - 25 Kohnen 1995, S. 97.

- 26 Nusser 1991, S. 31f.
- 27 Ibid., S. 31.
- 28 1つの小説を読み切るには、冊子を80及至100冊程度買い続けなければならず、それには24マルクの代償を必要とした。(Vgl. Wittmann 1982, S. 201.) またこの種の冊子は、売店の他、街頭販売や煙草屋でも買い求めることが出来た。(Vgl. Bucher 1981, S. 177.)
- 29 Nusser 1991, S. 29f.
- 30 Wittmann 1982, S. 140.
- 31 Nusser 1991, S. 50f.
- 32 Siemann, Wolfram : *Vom Staatsbund zum Nationalstaat Deutschland 1806-1871*, München 1995, S. 215.
- 33 Wittmann 1982, S. 143. 貸本屋の最大手では、ベルリーンのボルステル (Fritz Borstell) とウィーンのラスト (Albert Last) の名前が挙げられる。
- 34 Wittmann 1982, S. 208.
- 35 Bucher, Max u. a. (Hrsg.): *Manifeste und Dokumente zur deutschen Literatur 1848-1880*, Stuttgart 1981, S. 175.
- 36 Wittmann 1982, S. 145.
- 37 Bucher 1981, S. 177.
- 38 Sirges, Thomas : *Die Bedeutung der Leihbibliothek für die Lesekultur in Hessen-Kassel 1753-1866*, Tübingen 1994, S. 229, 243f. 尚左欄の娯楽文学の個所の「年鑑, 日記」の項目は、右欄では「年鑑, 文庫」に変わる。
- 39 Sirges 1994, S. 229-232.
- 40 Bundes-Preßgesetz, Allgemeine Bundesbestimmungen zur Verhinderung der Mißbrauchs der Preßfreiheit, §2.
- 41 Wittmann 1991, S. 253.

Das deutsche Pressewesen nach der Märzrevolution (2)

— Das Verlagswesen zwischen 1848 und 1871 —

Masaya HIRAI

Nach dem Scheitern der Märzrevolution ergriff die gegenrevolutionäre Seite wieder die Macht. Sie griff früh ins Pressewesen ein, das im „Vormärz“ eine leitende Stellung der Revolution innegehabt hatte. Der Deutsche Bundestag beschloß am 23. August 1851 die Außerkraftsetzung der „Grundrechte des deutschen Volkes“; damit wurde die Pressefreiheit eingeschränkt. Schließlich wurde am 6. Juli 1854 das Bundespreßgesetz, dessen Normen in allen Ländern des Deutschen Bundes gesetzliche Gegenwart waren, öffentlich bekannt gemacht. Die reaktionäre Pressepolitik hatte für das Verlagswesen schwerwiegende Folgen. Politische Zeitungen und Zeitschriften, die in den Jahren der Revolution eine demokratisch-liberale Tendenz aufwiesen, wurden in den deutschen Ländern ohne Ausnahme unterdrückt. Auch politische Literaten sahen sich einer Schwierigkeit gegenüber. Nach dem Sieg der Gegenrevolution zeigte das Publikum, das nach politischen Fehlschlägen enttäuscht war, nun mehr kein großes Interesse für politische Literatur. Daher verlor die politische Dichtung mit einem Schlag ihre Reputation. Das Publikum in der Reaktionszeit schätzte in seiner Enttäuschung die Unterhaltungsliteratur als Ersatz. Damit begann die Literatur in der Nachmärz-Periode, eine Rolle des Trosts für große Verluste und schmerzliche Entbehrungen zu spielen. So kam die Blütezeit der Belletristik.

In den 50er Jahren wurde die Verbindung periodisch erscheinender Druckschriften mit der Belletristik immer enger. Während Zeitungen und Zeitschriften im allgemeinen ihren Rückzug aus dem Bereich des

politischen Engagements antraten, boten sie ihren Abonnenten Lektüre zum Vergnügen, besonders Fortsetzungsromane in der Literaturbeilage, an. Anstelle politischer Informationen nahm der feuilletonistische Teil in den Periodica viel Raum ein.

Im nachmärzlichen literarischen Markt spielten Kolportagen und Leihbibliotheken eine große Rolle. Die Kolporteurs verkauften Druckschriften nicht nur in der Region, sondern auch in Großstädten. Ihre Kunden waren die Arbeiterschaft, kleine Handwerker, Diener und Dienstmädchen, die nur geringe Lesefertigkeit hatten. Vergleichsweise guten Absatz hatten Hefte der Kolportageromane in Fortsetzung: Schauderromane, Kriminalromane, usw. Der Preis der Bücher war damals immer noch so hoch, daß man sie nicht leicht kaufen konnte. Daher las die städtische Bevölkerung eher in den Leihbibliotheken, in denen es viel mehr Unterhaltungsliteratur als Fachliteratur gab. Kolporteurs und Buchverleiher konnten unter der starken Polizeiaufsicht überhaupt keine politischen Schriften anbieten, sie handelten nur mit Belletristik.

In den 50er und 60er Jahren wurde die Politik aus Romanen verbannt. Die nicht engagierte Belletristik kam in Mode. Der erste Grund ist, daß soziale und politische Kritik in den Druckschriften durch die Lenkung der Presse von der reaktionären Obrigkeit unmöglich gemacht wurde. Der zweite ist ein Wandel im Publikumsgeschmack. Das Publikum, das die Scheiterung der Märzrevolution erlebte, verlangte von der Literatur keine Politik mehr, sondern nur noch Vergnügen. Die Entpolitisierung des Verlagswesens ist deutlich ein Erfolg der Pressepolitik der gegenrevolutionären Seite.